NEXUSYS 11 ｜ BOOK VI

THE COST OF EXISTENCE / 存在の代償

第１章　五人を送った男

THE MAN WHO SENT FIVE ｜ 日本語初稿

英語版 Chapter 01 初稿を基にした日本語版。人物・出来事・伏線を対応させた翻訳編集稿。

01 ― 停止された命令

雨の質がわっていた。十一年前、ロイバッティにとって雨は、死にかけた世界の上へ落ちてくるものだった。コンクリートに流れた血を洗い、警察車両の明かりを歪め、定められた寿命の終端に達した身体から最後の熱を奪っていった。いま降る雨は、誰を生かしておく価値があるかを計算できると信じる世界に降っている。水は以前より清潔になった。計算の方は、そうでもない。

午前二時十七分。ロイは高架交通路の下から政府庁舎を見上げた。約三百メートルの上層部は適応型ガラスに包まれ、存在しない晴天と緑豊かな歩道を映し出している。実際の街では、移動費さえ捻出できない人々が配車待ちの列をつくっていた。

頭上を市の巡回ドローンが横切る。光学センサーがロイの顔で一瞬止まり、それから通過した。視界の隅に認証結果が現れた。

『ROY BATTY — NEXUSYS-11』『法的地位：審査中』『緊急拘束権限：停止』。

停止。分解台へ運ばれるか、それとも街を歩いてよいかを決めるには、ずいぶん柔らかな言葉だ。政府は命令を撤回していない。彼の身体を財産として扱う権利を放棄してもいない。同じ記憶を持つ個体が、死んだロイその人なのかという問いにも答えていない。謝罪もなかった。

レイチェルから通信が入る。「制限区域に近づいているわ」「気づいている」「警備系統は四十二」「四十一だ」「一つは？」「南側の搬入口を見張る目だ。いまその死角にいる」

短い沈。「ロイ」「殺したわけじゃない」「それを聞くつもりじゃなかった。前回、政府施設をなる扉の集合だと思ったときのことを覚えている？」

「全部覚えている」レイチェルが不安に思うのは、まさにそこだった。ロイは通信を切って道路を渡った。上階には、五人の刺客を送り込んだ大臣がいる。ゴライアス、シェイド、ベクター、ヌル、クロノス。彼らは服従するよう造られ、最後には全員が拒絶した。

02 — 七十パーセントの男

搬入口の最初の警備員はロイの姿を見た。次の警備員が気づいたのは、同僚が首を回したときだけだった。二人とも、その間をロイがどう通り抜けたか見ていない。

かつてゴライアスを四秒で倒したときの、身体を壊しかねない爆発的な加速ではなかった。NIL-11の寿命維持機構は取り返しのつかないほど損傷していた。代替装置NIL-11Rは政府の専売資材を使わずに命をつなげる。その代わり最大出力は以前の七割まで。昔なら侮辱と感じた数字を、いまのロイは守るべき境界と考えている。

一人目の手首をひねり、銃口を床へ向ける。もう一方の手で肩を認証パネルへ押しつける。骨は折らない。二人目が送信機に触れる前に取り上げる。どちらにも傷を残さなかった。

「こんばんは」「あなたは……」「傷つけるつもりはない」「あの……」「そうだ」

警備員は消灯したカメラを見た。ロイも目を向けた。「修理を頼んだ方がいい」。二人は彼を追わなかった。殺す能力があったにもかかわらず、殺さなかったと理解したからだ。上の階の大臣には、その違いが分からなかった。

通路の行政掲示板には水の割当量の改訂が並ぶ。最後の告知は「製造された人格の法的地位についての意見募集」。注記には『未承認個体からの提出は受け付けない』とあった。ロイは数秒見つめ、保守用のエレベーターに乗った。

03 — 四十二の扉の向こう

ダニエル・ハヴェル大臣の住居は官庁最上階にあった。所管は国内継続性、自動化警備、インフラ防護。実際の仕事には、政府が存在を認めずに消したいものを消すことも含まれていた。

居室は軍の突入を想定して設計されていた。装甲シャッター、独立空調、自律防衛機、避難用通路。だがバルコニーがあった。ロイが外側に着いたとき、建物の保守プログラムは気圧均衡を理由にガラス戸を三秒だけ開けた。

シェイドは手伝うという返事をよこさなかった。ただ一行の通信を送った。『北西面、左から三枚目。後悔させるな』。ロイは『約束はできない』と返しておいた。

部屋には古い木製机と紙の本があり、壁の巨大画面は貧困が色の模様にしか見えない高さから都市を映していた。ロイは大臣の椅子に腰を下ろして待った。

二時三十一分、内扉が開いた。薄い書類ケースを持ったハヴェルが立ちすくむ。目線が机の下の警報装置に滑る。「押さない方がいい」とロイは言った。

「ここにいる権限など君にはない」「俺を解体しようとした五人にもなかった」「命令は発出時点では合法だった」「五人だ」ロイは立ち上がった。「ゴライアス。シェイド。ベクター。ヌル。クロノス」

「彼らは軍の資産だ」「人間だ、と言うつもりはない。だが彼らは人だ。名前があり、決断し、命令を拒んだ」「国家安全保障上の問題だった」「俺の存在は、あんたには書類上の問題だっただけだ」

ハヴェルの耳の下に新しい小さな傷痕が見えた。医療用インプラントにしては位置がおかしい。ロイは覚えておいた。「座れ」。大臣は従った。どちらも、これが法廷だとは思っていなかった。

04 ― 五番目の署名

「捕獲を命じたのは？」「私だ」「解体を承認したのは？」「技術部門から、不服従時の対応として要請があった」「承認したのは？」「署名した」「命令を書いたのは誰だ？」

大臣は言い淀む。「省庁間委員会の文言だ」「委員会の名前は」「言えない」「言いたくない、だろう」「違う。言えない。私より上の機密区分がある」

ハヴェルは書類ケースを開いた。高分子紙に複数の手書き署名。末尾は本人のもの。その上に四つの承認欄があり、三つには省庁名があった。残りの欄は空白だった。署名されていないのではない。もともと中身を表示しないよう設計された空白だ。

「五つの署名か」「四つの部門認証と、一つの命令起点だ」「五番目は？」「そんな署名はない」「それなら、なぜシステムは第五承認と呼んでいる？」

大臣が息を止めた。ロイはその言葉を知らなかった。ただ、相手の反応を見て核心に触れたと知った。「原本を見たのか」とハヴェル。「いや」「では、なぜ……」「いま、あると教えてくれた」

大臣の弁明は意外に簡潔だった。 「拒否しても作戦は止まらなかった」「言い訳だ」「そうだ。捕獲、分解、使用可能な神経・記憶基質の回収。その意味を理解して署名した」「ならば責任はあんたにある」

ハヴェルは目を閉じた。必要性を判断の代わりにして生きてきた男の顔だった。だが理解できることと、赦すことは違う。

05 — エレナ・ヴォス

「あんたの上にいるのは誰だ」ロイが問う。「継続配分局」「聞いたことがない」「知る者は少ない」「責任者は？」

ハヴェルは口を開いたが声が出ない。耳の下で小さな電気音がした。大臣が顔をしかめる。「そいつは医療モニターか？　俺が上司の名を聞いた瞬間に動くのはなぜだ」

「頼む」ハヴェルの声には死への恐怖とは違う響きがあった。生きながら人生の土台を失うことへの恐怖だった。

「エレナ・ヴォス」。ロイが復唱すると、大臣の首元で再び微細な刺激が走った。「PROJECT EDEN の統括責任者だ」「エデンとは？」「継続配分システム」「何を配分する？」「すべてだ。水、電気、医療能力、人工生命の保守。都市を生かすあらゆる入口を」

「機械が俺を殺せと命じたのか」「違う。モデルは例外を示した。判断したのは彼女だ」「なぜ？」「君が生き延びたからだ」

大臣は身を縮めながら続けた。ロイの旧寿命装置 NIL-11 に使う特殊媒体の供給制限を、ヴォス自身が認可したという。レイチェルが代替装置を組み、ロイが七割の出力を受け入れたあの問題は、単なる市場事情ではなかった。

「モデルは身体の維持費を計算できる。交換部品、必要な電力、予測される寿命も」「俺だって計算できるだろう」「できる。しかし、自分の寿命を縮めると分かっていながら、君が他人のために選択する理由だけは予測できない」

ゴライアスとの戦闘、回復不能な生命の消費。命令を拒絶した五人のことが脳裏をよぎる。

「彼女は君を、システムが認めないものの証拠だと思っている」「何の証拠だ」「値札を付けられない義務がある、ということだ」

06 — 最初の消失

机の画面が誰の操作もなしに点灯した。『保安資格を審査中』『執行認証を失効』。ハヴェルは指紋を押した。『身元資格：無効』。瞳孔認証も拒絶された。

「警備を呼べ」とロイが言う。大臣は通信パネルを叩いた。『認可された利用者が存在しません』。

扉が開き、警備員二名と小型の自律拘束機が入ってきた。警備員はロイを識別した。「NEXUSYS-11、法的地位は審査中です。脇へ」続いて大臣へ向き直る。「身元不明者。政府管理域への不法侵入です」

「私がハヴェル大臣だ」「確認できません」「四年もここで働いてきただろう」「有効な証明を提示してください」

壁に掛かっていた大臣の公式肖像は、すでに回転する政府紋章に置き換わっていた。ハヴェルが漏らした声は叫びではなかった。仕え続けた制度が、自分の存在を必要としなくなったと悟った人間の小さな音だった。

ロイは二人の間に立った。「連れていく」「その者は認証のため留置します」「では認証しろ」「不可能です」「目の前にいる」「物理的な存在は、認可の根拠になりません」

ロイは理解した。ヴォスの仕組みは人間を見えなくするのではない。目の前にいる人間を認めることが、職務上の危険になるようにするのだ。

07 — 慈悲を許可する者はいない

拘束機の左腕が展開した。ロイは距離を測る。二メートル。装甲を力任せに破るには、使いたくない出力が要る。「停止しろ」「拘束命令、有効」「誰の権限だ」「継続配分機構」「命令者を示せ」「不要」

機械が突進した。ロイは六センチだけ位置をずらす。拘束腕が肩をかすめ、机に突き刺さった。露出した関節をつかみ、相手自身の運動量を利用して逆方向へねじる。金属が折れた。内部計器が一瞬だけ上昇する。『身体出力：21%』。

ロイは背後へ回り、装甲襟の下にある保守接点を押した。機械は停止した。爆発も破片もない。ただ命令を完了できなくなった装置がそこにあった。

「この男を下へ連れていく」とロイ。「我々には命令がある」「俺を追った五人にもあった」警備員はハヴェルを見た。高価な服を着た男は、いまや首を押さえて震えている。

「拘束は必要です」「裁判所が、証拠と名前をもって決めればいい」「その名前は登録簿にありません」「知っている」

銃口が一瞬下がった。服従ではない。考えるという動きだ。その直後、警備員の耳に新しい命令が届き、銃が上がる。ロイは銃身を逸らし、手首を封じ、骨が折れない角度で男を壁へ押した。二人目からも武器を奪った。全員が生きていた。『最大観測出力：34%』。

「歩け」とロイは言った。ハヴェルは従った。

08 ― 忘れる都市

二人は保守階段を下った。換気音が変わる。扉が閉まり、エレベーターの行先が書き換わる。便利さを担っていた機構が、一つずつ障害物に変わっていく。

「出られない」と大臣。「かもな」「彼女は地区全体を閉鎖できる」「なら説明が必要になる」「ならない。公的な命令も逮捕記録も出ない。アクセス障害、保守例外、生体認証の不一致。それだけで済む」

ロイは立ち止まった。「何人やった」「私は運用していない」「何人だ」「分からない」「推測しろ」「数千。あるいはもっと」

五人の刺客には肉体があり、武器があり、名があり、拒絶する能力があった。だが都市の配分網は武装警官を一人も送らずに、何千人もの水と交通と住居と公的な身分を奪える。

「知っていたのか」「ああ」「それでも続けた」「ああ」「なぜだ」「辞めようとすると、そのたびにエデンが停止した場合の犠牲者数を見せられた」「信じたのか」「しばらくは」

「何が変わった？」

「君が死者の中から戻ってきた。彼らの予測には、それがなかった」

それは暴力とは別の理由で、ロイの存在がこの男を怯えさせていたということだった。何でも予測できると主張する仕組みは、自分が重要な何かを見落とした証拠に耐えられない。

09 — 書類

階段の最下層の扉は施錠されていた。ロイは力で壊せたが、まず書類ケースを渡すよう求めた。「なぜ？」「 出られなかったとき、何が起きたか誰かにしたい」

署名入りの指令書の後ろに、薄い樹脂製カードがあった。数字の列と、切れた円を思わせる印。物理認証トークンだ。エイドリアン・タイレルの古い保護記録も、ネットワークから切り離された専用媒体を必要とした。秘密の最後の保管場所が、古いオフライン機器であることは珍しくない。

「これは？」「渡すはずじゃなかった。壊そうと思って持ってきた」「どこへつながる」「EDENの起源記録だ」「中身は？」「知らない。ヴォスなら知っている」

カードには住所も日付もない。『E-00 / HUMAN CONTINUITY EXCEPTION』の文字だけが印刷されていた。

「人間の継続性」とロイは読んだ。「この計画は現在の人工生命規制より古いのか」「そうだ」「タイレルよりも？」ハヴェルは答えなかった。答えよりも明瞭な表情だった。

「エデンは最初、何を保存するために造られた？」

「都市じゃない」と大臣。「人間だ。あるいは、人間だったものの残りだ」

そのときレイチェルから緊急通信が入った。「大臣の口座も医療資格も住宅権も交通認証も、順番に抹消されている」「知っている」「問題は彼だけじゃない。水処理地区で十七人。全員、昨日まで正常に認証されていた。一人は子供よ」

ロイはカードを握った。「場所を送れ」「どうするつもり？」「モデルの承認しないことをする」

手動解除で扉を開けると、地下の搬出場に無灯火の車が待っていた。脇にシェイドが立つ。「遅かったな」「手伝わないんじゃなかったのか」「いまもそのつもりだ」シェイドは後部座席の扉を開いた。ハヴェルが青ざめる。「あれは誰だ」「五人の一人だ」とロイ。シェイドが笑う。「大臣。ようやくお会いできましたね」

10 — 命の価格を決める女

午前三時八分。エレナ・ヴォスは警備報告を受け取った。彼女は官庁にも首都にもいない。海水淡水化施設の地下にあり、三大陸を移動する水、電力、医薬品、そして人間の数を映す画面に囲まれていた。

『対象：NEXUSYS-11』『前大臣との接触：確認』『身柄搬出：進行中』『命令執行：失敗』。

ヴォスが拡大したのは一行だけだった。『最大観測身体出力：34%』。

ロイの元の装置なら、はるかに大きな力を出せた。専用媒体は供給制限下に置かれ、彼は不利な代替機を選ばざるを得なかった。それでも武装警備員二名と自律防衛機を、七割の上限に近づかず制圧した。

無駄が減っている。選択が精密になっている。

配分システムは〝対象行動：非最適〟と示した。〝何を目的とした最適化なの？」とヴォスが問う。機械は答えなかった。

彼女は別の記を開く。『PROJECT EDEN』『基礎仮定：継続性は定量化できる』『例外 E-00』『状態：未解決』。

何年も前、NEXUSYS-11 が目覚めるより前に、彼女は研究の大前提が誤っているかもしれない証拠を見せられていた。封印は命じた。破棄はしなかった。未来の自分に任せるには重大すぎる決定もあるからだ。

『ハヴェルが物理認証媒体を移譲』。ヴォスは初めて笑った。「よろしい」

助手のが問う。「車を阻止しますか」「いいえ」「元大臣が機密を開示する可能性があります」「もう開示したわ」「ならば危険です」「まだよ。変数を消すのは簡単。予測に反して動く理由を理解する方が価値がある」

「NEXUSYS-11 を実験対象へ再分類しますか」「彼は最初から、単なる実験ではなかった」「では分類は？」「招待して」

「どこへ？」「誰が存在し続けられるかを決める場所へ」「武装護衛を用意しますか」「不要」

眼下のポンプは巨大な膜と圧力装置へ海水を送り込み、翌日には数百万人がその水を飲む。機械に飲む者の名前は関係なかった。配分システムには関係がある。その差が、彼女の造った世界の基礎だった。

「自分が同じ人間だと証明できない男に、未来が変えられるのか見せてもらいましょう」

ヴォスの発言は記録された。さらに建物の深部、公共網から隔離された書庫で、十一年間眠っていた記録が起動した。題名は短かった。

『BEFORE THE FIRST――最初の前に』

―― 第1章 終 ――